

徒手整復の適応と限界 第10報

上腕骨脱臼骨折に対する徒手整復法

山田昌紀(清野鍼灸整骨院)

南波利宗(清野鍼灸整骨院)

村田朝子(清野鍼灸整骨院)

清野充典(清野鍼灸整骨院)

池内隆治(明治国際医療大学)

背景・目的

- 柔道整復術は、筋腱骨格の皮下損傷を非観血的に治療する伝統的医術である。肩関節は構造上、脱臼が起こりやすく、临床上遭遇する機会が多い。肩関節脱臼は、全脱臼の約50%を占め、脱臼に伴う合併症も多く見られる。今回は脱臼と骨折が同部位で発生した症例を経験したので報告する。

方法

- 患者:47歳男性。
- 診断名:右上腕骨大結節骨折および右肩関節脱臼
- 現病歴:階段から落下し、右肩部を負傷。病院にて右上腕骨大結節骨折および右肩関節脱臼と診断される。受傷後2日目に当院を受診し保存療法による治療を希望する。

方法2

- 整復手順: ①肩関節脱臼を整復する。
②大結節骨折を整復する。
③肩関節位置を確認し、位置異常が認められたため、再度肩関節の整復を行う。
- 患者姿勢: 患者は座位とする。

方法3

- 整復方法：①肩関節脱臼はゼロポジション法を用いて行う。その際、助手に骨片が転位しないように、大結節部を圧迫させる。
- ②大結節骨折は、直圧法にて整復する。
- ③肩関節全体の状態を確認し、肩関節の位置異常を認めため再度肩関節の整復を行う。その際、助手に骨片が転位しないように、大結節部を圧迫させる。

■ 整復方法(写真)



方法4

- 固定方法：骨折部直上より生ゴムにて圧迫し、テープにて固定する。患部に冷湿布を当て、肩関節を麦穂帯にて包帯を施す。三角巾にて上肢を提挙する。

■ 固定方法(写真)



経過

- 第2診目（整復後2日目）静止時痛が消失。患部の状態良く、固定を継続する。
- 第16診目（整復後23日目）右肩関節部、大結節部の位置が安定する。テープ交換を行う。
- 第20診目（整復後30日目）以降、徐々に患者の自己判断の基、仕事で患肢を使用し始める。
- 第28診目（整復後43日目）に固定をすべて除去する。

結果

- 上腕骨大結節部の骨折と肩関節前方脱臼を併発した症例に対して、徒手整復術を施した。
 - ①大結節部骨片の安定を保持して肩関節の脱臼を整復する。
 - ②大結節骨折を整復する。
 - ③肩関節を再整復する。

以上の手順により良好な結果を得られた。

考察1

- 脱臼骨折の際、最初に脱臼の整復を行うことが一般的である。
- 脱臼の整復を行う際、骨片が転位しないように工夫を要する。
- 骨折部は生ゴムによる圧迫と助手による圧迫を加えることにより骨片の保持を図った。

考察2

- 脱臼骨折において骨折を整復する際、関節の安定性が著しく低下しているため、整復時に加わる力により、関節の位置異常が再度発生することを考えなければならない。
- 今回は、肩関節の安定性を高めるため、患者の肘部・肩部を助手に保持させた状態で、骨折の整復を行った。
- 骨折整復後、肩関節の位置を確認したところ、若干の位置異常が認められた。

考察3

- 再度肩関節の整復をする際、骨片の再転位を起こさないように整復法を施すことが必要である。
- 骨折部は生ゴムによる圧迫と助手による圧迫を加えることにより骨片の保持を図った。
- 整復法は、患者の上肢を末梢牽引した状態にて、術者が上腕骨頭部に圧迫を加えることにより肩関節を整復した。

結語

- 脱臼骨折に対して徒手整復術を行う際、患部の安定性を極力保つ工夫をし、施術することが重要と考える。
- 今回の症例では、骨片部を生ゴムにて圧迫することおよび助手による圧迫を加えることで転位しないよう工夫した。
- 骨折整復後、関節の位置異常の有無を確認する必要があると考える。